

ISIOLO・WAJIR レポート

2006年1月 佐藤・Anthonio Njagi

序文

ケニアの北東部及びその他乾燥地帯が、ここ3年の間干ばつにみまわれ、住民は現在危機的な状況に陥っている。ケニア国土の半分以上はこういった乾いた大地、半砂漠化した土地からなっており、干ばつは頻繁に発生してきた。調査機関はこの区域を注意、警戒から緊急事態のレベルまで引き上げ、政府は支援を求めている。

この数年間、雨期になってもまともな雨が降らず、もともと緑の少ない土地から、家畜の餌となるような草木の類は姿を消した。そして牛を中心とした家畜たちは、餌を失って次々と死んでいった。こういった地域に住む人たちの多くは、生活の糧を家畜によって得ていたために、直接的に大きな打撃を受けた。まともに餌を与えられずにやせ細った牛からは、牛乳を得ることもできず、自身の価値も下落、通常の半値以下でしか売れない。食べさせる餌は入手すら困難を極め、そうしているうちに次々となすすべなく死んでいく。収入はおろか財産を失った人々は、水と仕事を求め大きな町の近くへと集まってきた。町といってもすぐに仕事が見つかるほど豊かではない。食べるものが無く、飢えで命を落とす人は、すでに数え切れない。

テレビや新聞で毎日のように干ばつ、飢餓に関する報道がなされている現在、1980年の干ばつ時同様、何かしら救援措置をとる必要性を感じ、近辺の状況と情報収集を目的に、まずは陸路での物流的境界線となるイシオロへ行き、その後可能であれば被災地のワジアへ向かう予定として調査を開始した。



ケニア政府 Special Programme
Arid Land Resource Management Project
による地図。
黄色部分が乾燥地帯
緑色部分が半乾燥地帯
ケニア山を中心とする高地は白色

メルからイシオロへ

メル(標高約 1700m)から 20km ほど行くと標高が一気に下がり(約 1100m)、土壌を含めた環境が一変する。メルまでは高い木や作物も豊かに実り、緑にあふれた風景だったが、長い坂を下ると、そこは緑の極端に少ない乾燥地帯だ。家畜の餌となるような植生物は皆無と言ってよく、耕された後、放置されたままの畑が目につく。ただでさえ今は乾期である。本来であれば昨年 11 月の雨季の前に種を植え、今は作物が育っていなければいけない。雨が少



ない、もしくは全く降らず、育たないまま乾いてしまったのだろう。もちろん今何かを植えたとしても徒労に終わることは目に見えている。畑の全ての植物に収穫まで十分な水を与え続けることなど一般農家には不可能で、もちろん次の雨期に雨が降る保証は無い。

イシオロ

イシオロ市内

イシオロは舗装道路の終端地であり、ここから更に先へ進むには荒れた未舗装の道路を行くしかない。ケニア中心部に比較的近い地域であるため、市内は光熱水ともに安定して供給され、食物の獲得も平時と変わりはない。しかしながら連続して 3 年まともな降雨がないことから大地は一層乾燥し、家畜たちの餌の獲得が非常に困難となって、牛はやせ細り、その価値は激減し、平常時の 10 分の 1 の値段で取引されることもある。家畜によって収入を得る人々にとってはまさに死活問題であり、その生活を苦しめる大きな要因となっている。現段階で一般市民の生命にかかわるような危機的な飢餓状態とは言えないが、現在の状態が続けば、他の地域同様、状況は更に悪化し、生命を脅かす飢餓に発展することは十分考えられる。



牛などに餌として与える草が 1 バッグ 60~90KSH で売買されているが、両手で軽く抱えられるほどの量しかない。草は中心部から 6KM ほど離れた川の近辺ごく一部の地域で採せられることができる。数年前まで川があり植物も生えていたが、現在では砂地になっていて地形のみとどめている場所もある。

交通・輸送

メル方面からイシオロまでは舗装道路だが、ここから先は未舗装の道となる。市内を抜けてバリアー（武装警官による検問所）を過ぎるとすぐ道は二つに別れ、サンプル、マルサビット、モヤレ（エチオピア国境）へ通じる道とワジア方面へ向かう道がある。ワジアまで行けばそこからエルワク（ソマリア国境）、マンデラ（ケニア北東端）へと通じる。

マルサビットへはバスが出ているが、ワジア方面へは公共の交通機関は無い。一般の人が行くには商業車両（運送業者など）のトラックやピックアップがそちらへ行く時にお金を支払って乗っていくしかない。検問所での警護責任者に話を聞くと、支援食料を乗せたトラックやトレーラーはそう多いわけではなく、日に数台見かける程度だそうだ。他、赤十字はエチオピア側から輸送を行っているという話もあり、事実そちら側から赤十字のトレーラーが何台もイシオロを通してナイロビに向かっていった。政府が空路で運搬している例もある。

セキュリティに関しては、マルサビット方面で1月7日 18:00頃、食料や乗客を乗せた運送業者のトラックが6人のライフル武装集団に襲われたことがNATION紙で報じられた。死傷者ではなかったものの、積荷から乗客の荷物にいたるまで強奪された。ワジア方面に関しては、警察のキャンプが数箇所ではあるが存在すること、武装警官による巡回が行われていること、また地理的に隠れる場所が非常に少ないなどといった理由から、決して良いとは言えないが、マルサビット方面に比べると幾分かまし、といった意見を多方面から聞くことができた。イシオロからは主にそういった商業車両がワジア間を頻繁に行き来し、マウア方面からはミラーを乗せた車両がほぼ毎日出ている。

DC(District Commissioner 県知事)オフィスから干ばつに関する調査を行う正式な許可を書面で得ることが出来た。今回はあくまでも調査のみなので、具体的な食糧支援に関する協力要請はしなかった。

マウア:ミラーの主産地、メルから約20kmの高地

ミラー:木の芽で、噛んでいると覚醒作用があり、ケニアでは合法

イシオロからワジアへ

ガチュル

イシオロからワジア方面、約60kmに位置する小さな町。

すぐ近くに警察のキャンプがあり、その Corporal(伍長)に会い、事情を説明すると、協力を呼びかけてくれ、そのチーフを中心とした人々に、現在の状況について以下の内容の説明を受けた。



- ・この地域の中心部の人口は約 3,000 人、近辺の遊牧者を含めればさらに多くなる
- ・病院がない、交通手段が無い、薬品が入手困難（イシオロまで行かなくてはならない）
- ・井戸が 16KM 先に一つだけしかない
- ・援助物資も通り過ぎていく
- ・学校は一つだけあるが、教室はない
- ・牛、ヤギなどの家畜がどんどん死んでいく
- ・今まで赤十字や WFP、政府機関を含め援助物資・食料の類が届いたことはない。

イシオロからほんの 60km ほど離れたただけなのに、厳しい状況に直面している。どこを見渡しても家畜の餌となるような草は見当たらない。砂と岩ばかりで、植物と言えは葉をほとんどつけない、トゲだらけの木と、真っ白に乾ききって枯れた草が、所々に地を這っているだけだ。



ワジアからの帰りに寄った時、覚えていてくれた住民がいて、つい先日も支援食料を運ぶ大きな車を見たが、この町を通り過ぎていってしまったと話してくれた。物資が十分な量に達していない現状では、こうした町がたくさん存在するのだろう。



ワジア

ワジア市内

日中最高気温は 35 度にも達し、極度に乾燥している。標高約 300m。イシオロから約 350km、トラックで 20 時間の旅だった。

周囲と比較して大きな町であり、市内に関してだけ言えば、人々に食糧、水不足による生命の危機はない。物価の高騰も品物によってはあるが、市内で定職を持ち生活をする人々に対して大きな影響を与えるに至ってはいない。

ワジア District はケニア国土のおよそ 1 割を占め、トゥカナに次いで 2 番目に大きい。エチオピア、ソマリアそれぞれに隣接する。約 40 万人が住み、そのうちの 70% は生計を家畜に依存している（遊牧民など）。元々乾いた土地であった上に、ここ数年に渡って雨期になっても

雨が降らないという事態によって、地上から緑は姿を消し、家畜たちの食料は皆無となった。やせ細った家畜からは牛乳を得ることは出来ず、価値は下がり、その病気も懸念されることからたとえ売れたとしても通常の10分の1の値段まで下がる場合もある。そうしている間に家畜たちはばたばたと飢えて死んでいく。収入も無く、水も無い。比較的水が得やすい市のすぐ側まで近づいてくる。その間にも家畜の数は減っていく。長い旅を経て到着した時には全ての家畜、いわば財産を失っていたという人も少なくない。そうして日々の糧を得ようと仕事を探したところで、市内とて豊かなわけではなく、簡単には収入を得ることが出来ない。食料を買うことも出来ず、どうすることも出来ない。援助による食糧が届くのが先か、それともそのまま力尽きるのが先なのか。町のすぐ外にはそうした人がすむマニャタ(遠方から避難してきた人々が住んでいる区画、遊牧民の様式で木の枝と土によるおわん型)が多数存在する。遠くの地方の遊牧民はほぼ皆こうした町に隣接する場所へ避難している。いくら家畜の食料を探しても、乾ききった大地にはほんの一切れの草をも見つけることが出来なくなってしまったからだ。



市外・マニャタ

市内を抜けるとすぐにマニャタがある。途中の道端でやはり牛が死んでいる。持ち主に話を聞くと、30匹いたうち、最後の2匹の片方だという。もう片方は別の場所につながれた状態で生気の無いまま横たわっていた。あとは皮を売るくらいしか使い道は無い。やはり遠くの方から水と仕事を求めて来たそうだ。財産を全て失い、今後の事は全くわからないと語った。

道沿いに広場のような場所があった。入っていくと、もの凄い悪臭が漂い、いたるところに牛やヤギといった家畜の死骸が放置されているのを見た。とても数え切れる量ではない。ほとんどが牛で、骨だけの状態となって、息絶えてからかなりの時間が経過していると思われる物もあれば、つい先ほどまで生きていたのではと思える物もあった。家畜達はここに捨てられている。

マニャタには所々に井戸があるので、この近辺は今のところろうじて水を得ることはできる。もちろん足りているわけでもないから、厳しい状況には違いない。今後移動してくる人が増えればそれだけ需要も増え、井戸がいつまでもつかもわからない。マニャタはいくつかの区画に分かれながらまとまって存在している。その内、人が全くいない区画があったので聞いてみると、前は人が住んでいたのだが、飢えて亡くなった人を埋めていったら、区画一つ全てが墓だけになってしまったのだそうだ。ここだけでおよそ50人。一人ずつ埋められ、土が盛られた上を小石で覆われ、その周囲を木で囲ってある。真新しい物もあり、つい2日前に亡くなっらしい。その隣には土を掘り返して、次に死んだ人を待ち構えるかのようにぽかんと口を開けた真新しい穴がある。人が死ぬと24時間以内に埋めてしまう習慣があるといつかの新聞に載っていた。その為に飢えて亡くなった人の数を数えるのは非常に難しいと。

シリアルボード(市の穀物倉庫、援助食糧が保管されている)の横を通りかかると、ちょうど荷物を載せて数台のトラックが出かけるところだった。住人がフェンスまで寄り集まり、車両が走っていくのを見守っている。数人が私のほうへやってきて取り囲むようにしてから「役人(DC オフィスやチーフなど)は援助として受け取った食料を横流しして私腹を肥やしている。俺達のところまで食料が来ないんだ」と口を揃えたように話していた。市近辺の人たちの間で不安が不満に変わり、その矛先は目先の DC などに向けられているようだ。(この事は翌日と翌々日の新聞で、実際にガリッサ地方で、ケニア政府のプリントがある箱に入ったままの支援食料が市場で売られていた事実が写真付きで報じられた。逮捕者も出たが仕入れ元はまだ明らかになっていない)

郊外の集落エルアド、他



ワジアから南へ約 9km 走ると EL-AD という小さな集落へ着く。足元にあるのは砂と岩のみ。遠くを見渡してもそう変わらない景色。前日 3 頭の牛が死んだそうだ。住人に案内してもらいながらいろいろな話を聞く。全ての家畜を失い、さらに 3 人の子供を飢えで亡くした母親がいると言う。つい先日亡くなった子供がいて、真新しいお墓が集落の

はずれにひっそりと佇んでいた。井戸は一つだけあるが、セメントの一部が砕け、外からの汚れが混入し、とても綺麗な水とは言えなくなっている。わずかな援助食料が運ばれてきたが、ほんの 2、3 日食いつなぐことができれば良い程で、次の援助がいつ来るのかもまったくわからない。病院、薬品もワジアまで行かなければならない。やせ細った母子がいて、食べるものがないので授乳できず、水に砂糖を混ぜて赤ちゃんにあげていたそうだ。二人を病院へ連れて行くよう頼まれたが、本人は最後まで抵抗していた。他の子供達の面倒が見られずに死んでしまうことを恐れていたらしい。最後は他の人々に押し込まれるようにして車に乗り込んだ。病院では母子共に栄養失調と診断された。必要なのは栄養、食べ物、牛乳、ただそれだけだ。

エルワク・マンデラ(ソマリア)方面。こちら側にはバリアーがあり、武器の流入や不法入国者などを警戒し、入ってくる車は厳重にチェックされる。約 10km 走って集落へ。チーフに案内してもらおう。ロバが死んでいるのをここで初めて目にするようになった。もちろん他の場所と同様、牛も倒れている。持ち主にとっては最後の牛だったそうだ。財産を失って頭がおかしくなってしまう者、自殺してしまった者もいる。





住居が点在する中を歩いていると、他の住居と同じような作りの小屋の中に、一人の若者が手足を鎖でつなわれ、座り込んでいる。側には食べ物が入っていたと思しき空の器。鎖は両親によってかけられた。家畜が全て死に絶え、絶望し、頭がおかしくなってしまった彼を心配してのことだそうだ。放してしまうとどこへ行ってしまうかわからない、死んでしまうかもしれないから、ここに座らせているとの事。彼は手足の自由がきかないまま、ここで寝起きし、食べ物と水を与えられる。

130 人の生徒を有する学校があった。強い風によって屋根が壊れ、トラス(屋根を支える木材)が半分以上完全に折れて、今にも屋根が落ちてきそうだ。子供達は中に入ることができず、外で学んでいる。

マラリアを患った、子供を抱えた妊婦をワジアまで連れて帰る。この女性も最初やはり他の子供を心配して拒否していたが、最後は主人とチーフ、他の住人に説得され、車に乗り込んだ。

ここのチーフは太っている。そういえばガチュルのチーフも決してやせてはいなかった。他の住民とは体格が全く異なっている。支援物資・食料が陰で売られたりしているのは割と頻繁に行われているのだろうかと思ってしまう。

いたる所で牛が死んでいる。それは遊牧民、家畜によって生活の糧を得ている彼らにとって、まさに財産を失うことを意味する。自分の財産が、なす術もなく目の前で倒れていく。そして災難は容赦なく自分の家族、更に自分自身にも降りかかってくる。

学説によれば、乾燥地帯における干ばつはある一定の周期を持って発生(降雨量の減少)するので、それ自体を未然に防ぐことは不可能に近い。つまるところ、より現実的な対応手段として、いかに被害を最小限度に留めるかということに焦点を絞らなければいけない。規模の大小にかかわらず貯水施設が最低限必要と考えられるが、そういった点で今までケニア政府が主だった対策をとって来なかった、準備を怠っていたと非難する声もある。1980 年の干ばつより、ケニアの乾燥地域において組織だった状況調査が定期的に行われるようになり、常に監視されてきた。それにも関わらず、再び飢餓状態の危機に差し迫る現在まで、具体的な対応策はとられていない。

DC オフィスには各地からのチーフなどが朝から列をなしてやってきていた。そのほとんどが食糧支



援の要請だという。歩くのもやっとという人たちも来ていた。

DEO (District Education Officer・教育委員会の長)から現在の学校、子供達の生活や給食について話を聞く。

遠隔地での水不足、食糧不足も深刻だが、それらは結局、親が授業料を払えないという事に起因する。プライマリースクール(8年制。ケニアはこの8年とセカンダリ4年制からなり、その上が大学など)は現大統領の政策によって公立校は全て授業料免除となったが、セカンダリは有料なので、とても深刻な問題となっている。既に3つの学校がこの事により閉校した。

1980年代にもケニアは深刻な干ばつ、飢餓が広がり、天理からも食料などの支援物資と共に、物資運搬用の多数のトラックが贈られた。その内の一台がなんとここワジアDCに存在し、しかも整備をし続けて今でも走っていると言う。自己紹介をした時にDEOは天理教という名前を覚えていてくれた。トラックにもしっかりTENRIKYOとペイントされているとの事。実際に目で見て確かめなかったが、仕事で遠くへ行っているらしく、出会うことは出来なかった。

近所のセカンダリースクールを視察。建物は石でしっかり作ってある。学期が始まったというのに、300いる生徒の内3分の2は授業料が払えないせいで学校に来ていない。水は井戸があるので問題ない、他、ケニアの一般的な学校で見られる設備不良などの問題があるようだが、一番はやはり生徒の親からの授業料が支払われないので、運営が苦しいところのようだ。今はまだ何とかやり繰りしているようだが、いずれ給食にも支障をきたすことは間違いない。しかし一校を覗いただけでははっきりとした結論はだせず、学校に焦点を絞った調査が必要だ。



その他の地域

エルワク

ワジア-マンデラ間のほぼ中間に位置し、マンデラディストリクトに所属する。ソマリアとの国境がある。危機的な状況であると頻繁に耳にした。

マンデラ

ケニア北東の端に位置し、エチオピア、ソマリアの両国境が存在する。流言だが昨年12月に、食べるものが無くて、弱っていた自分達の子供を家族で食べたという話がある。

マサイマラ国立保護区

昨年12月からカバの死が増え始めた。過去一ヵ月半で60~80頭が、干ばつによる水位の低下、餌の減少によって、カバ同士で争って死んだり、子殺しも目立っていると言う。また、野生動物が人間を襲うケースも増えている。



総評

現在のワジヤ地方、関連地域における干ばつの被害は非常に大きく、すでに飢えによって亡くなっていく人が後を絶たない状況であり、食料を中心としたより多くの支援を必要としている。被害の要点は

- ・ 降雨量の激減によって家畜の餌である草木がなくなり、家畜が大量に死んでいく
- ・ 家畜で生計を立てる人々は収入を得ることができなくなる
- ・ 子供の授業料はおろか、日々の食料を得ることも難しい
- ・ 水と仕事を求め、大きな町へと移動し、マニヤタの人口が増加
- ・ 現在までに政府などから届いた援助物資は十分な量とはとても言えない
- ・ 政府に対する不満からセキュリティの悪化が懸念される
- ・ 遠隔地では更に深刻な水不足、食料不足が起こっている
- ・ 移民による土地、食料、家畜をめぐる人々の争い
- ・ 人々の健康状態の悪化、医療施設や薬品の不足

イシオロでは今の時点で緊急事態とまではいえないが、既に家畜の餌がない、家畜の価値の下落、また餓死といった例もあることから、今後より深刻な事態へと発展する可能性は非常に大きい。

ワジヤにおいては市外マニヤタ、及び郊外の集落に被害は集中している。



干ばつ・飢餓に対してとることができる支援方法を、その実施に必要な期間によって3つに分類する。

短期 食料援助

より確実に被災者に届く方法を選択する必要がある。ワジヤにおいては食料の他、牛乳（粉）も需要が非常に高い。あくまでも緊急事態を脱するための一時的支援である

中期 貯水施設の設置

定期的に訪れる干ばつに、可能な限りの準備する。その規模は、集落に設置するタンク程度から、貯水池またはダムなどを含む。灌漑用水の設置、引き込み。

長期 植林・環境の復元

乾燥地帯での植林を続け、土壌を豊かにする。森を作って雨の降りやすい環境をつくり、砂漠化を食い止める。



行程

- 7日(土) エンプ月次祭後、メルへ
8日(日) マツでイシオロへ(約1時間)
市内調査
9日(月) DCオフィスへ
各種業者と調整
10日(火) 輸送業者の車でワジアへ向かう予定だったがキャンセル
11日(水) 6:30 イシオロ発
9:00 ガチュル着 チーフ他と状況についてミーティング
12日(木) 2:00 ワジア着
DCオフィスへ
DEOとミーティング
市内調査
13日(金) 近辺調査(マニヤタ)
DEOミーティング
DAO、Arid Lands Resource Management Project ミーティング
近辺のPRY、SEC学校訪問
14日(土) 市外(約10キロメートル)の集落訪問調査(2箇所)
19:00 マウアへ向け出発
15日(日) 9:00 マウア着 終了



012401